在宅ケアネットワークミーティング『在宅における目標設定と卒業』を開催しました！

- 日時：2019/10/20　10時～１２時
- 場所：京都医健専門学校
- 参加人数：25名（OT 2名、ST 1名）部員6名
  合計31名
- 講師2名からの話題提供を行っていただき、その報告をもとに参加者間でグループワークを行い、情報共有及び意見交換を行った。

『在宅における目標設定』
京都きづ川病院 岸田和也先生

- 目標設定を行う事の効果について
  - 目標設定を行う事で利用者のQOLやリハ参加意欲の向上につながる。
    目標を明確にすることで介入する点が明瞭になり主体性を引き出すことに効果がある。
- 目標設定を行うことに大切なこと
  - 本人（家族）と療法士で、合意形成を図りながら検討する過程が、本人の主体性を引き出すうえで重要。
  - SDM(shared decision making)を用いた中で、1～9つのプロセスの中で本人の意見も含めて、検討することを重要視。
- 訪問リハ事例の中で
  - SDMを用い、目標を達成するために何が必要になるかを具体的に伝え、その都度目標に対する達成度等を家族や本人に対してフィードバックを図ることが重要である。

『訪問リハの卒業』
御所南リハビリテーションクリニック 秋山貴洋先生

- 制度・リハビリテーションマネジメントについて
  - 多職種連携と目標の再構築が利用者の方向性や卒業を考える上で重要な要素になる。
- 利用者主体の目標設定の必要性と再構築
  - 療法士の一方的な目標提示にならないよう注意が必要。
- 事例の紹介
  - 生活上の目標を達成し終了となった例と通所リハビリに引きついだ例の呈示。家族、利用者、療法士等を含め多種職でのリハ会議の開催や見直しが目標設定に重要な点だった。

グループワークで現場の実際の悩み事など交えて意見交換、情報共有を行いました！

- 訪問、外来含め長期間行っている例では、どの段階で修了と考えるのか、悩んでいる。
- 訪問から通所への移行のタイミングが難しい。
- 利用者から『何も困っていない』といわれた際、何を主体的に目標にするか悩む。
- 病院から在宅へ帰った際の目標設定の構築が重要ではないか。
  - など多数の意見があがったなかで、利用者含めケアマネージャーや家族などと連携をとること。
  - 利用者が主体となるようにコミュニケーションを図り、PTが評価したことから合意を得ること。講師から『合意形成・目標設定の再構築』の重要性を学びました。

Q&A

Q：訪問リハの修了者の動向について

A：通所への移行・入院が多い。生活上の目標達成が出来、修了した例はまだ少ないが、いずれの方向性においても、利用者との目標設定を行う事が有用であったと考えている。

参加者からの感想

まず、岸田先生のご講演では、在宅での目標設定には、利用者さんとセラピストの合意形成が大事であることを再確認できました。

訪問リハビリの初回の評価、計画書作成の際に意識して取り組みたいと思います。スマホを使っての移動手段や交通期間の検索など、具体的な情報提供が印象的でした。

秋山先生の取り組みでは、グループホームへの転居の事例報告が印象的でした。独居で家族様の支援が難しく、安全な在宅生活の継続が困難な場合は、リハの専門職の視点で生活場所の変更などを提案することも、マネージメントかと感じました。

まだまだリハビリ専門職の中でも、卒業や地域への参加に繋げていく形に試行錯誤している段階で、個々のスタッフによって差があると思います。

またケアマネージャーや多職種への在宅リハビリの理解、連携に課題が多いと感じています。定期的に多職種を交えた研修会で、事例検討や意見交換が出来ればと思います。

洛西ニュータウン病院　訪問リハビリ　木村裕